

北川 哲雄 編著

『ESGカオスを超えて:新たな資本市場構築への道標』

(中央経済社)



本書読了後の感想は「『ESG』なる概念がいわば『空中』を飛び交う中ではあるが、各企業、それを司る経営者は『地上』にて冷静に自社がなすべきコトを吟味し、淡々と実行していくべき」である。「ESG」（環境・社会・企業統治）なる概念が現在、どのような議論の状況にあるのか、くわえて、そうした状況下で企業、その経営を司る経営者、それらのあるべき姿は、と本書は流れている。ESGの議論の現在地を確認するに、有益なる一冊である。

国家の垣根を超えて、また、その存在感が国家を超えるレベルとなっている企業組織の個々

関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授

吉村 典久

の枠組みを超えての協力、対応が求められるものとして、「ESG」に関わる諸問題が近年、盛んに取り上げられてきた。本書の冒頭でも編者は「われわれは『ESG』カオスの中にいる。ESG、SDGs、サステナビリティという言葉が一般紙であっても新聞に出ない日はない」とし、その期間も「このような状況が少なくとも5年は続いている」(p. i)とする。『日本経済新聞』の匿名のコラム「十字路口」(2022年8月24日付)でも、「これほど長期に市場で使われるアルファベット造語は30年余りのマーケットウォッチの経験を振り返っても、あまり記憶にない」とされる。

このように持続力のあるワードであるが、その現状を編者は「混沌」を意味する「カオス」と捉えて、「社会現象と言ってもよいが、この流れの本質をどのように理解するかは非常に重要である。それができないと、これからもESGカオスの中でわれわれは永遠に右往左往することになるだろう」(p.i)と続ける。「右往左往」することなきよう、「本質」、その議論の現状を論じているのが、本書である。編者をはじめとして、実務家、シンクタンクのリサーチャー、くわえて実務にも精通する研究者など「論客揃い」の執筆陣となっている。編者以外の執筆者もカオスと捉えており、定義自体が曖昧である、あるいはESGに関わる情報開示の媒体上に数多くの

フレームワークや基準が氾濫、その様子は「アルファベット・スープ」(p.36)と呼ばれる状況にあるとする。他章でも、それを「英文字略称の氾濫」(p.187)と訳して、「ESG」なるワードをその代表格と見なしている。

章立てを駆け足で見えていこう。まず「第0章 いかにESGカオスを超えて行くか」で問題意識と各章の要約、注目点が整理される。そのうえで「第1章 シングルマテリアリティとダブルマテリアリティの相克」「第2章 非財務情報開示基準の統合はいかに進むか」では、特に非財務情報の開示のあり方、開示基準の統合、収束の現状が論じられている。「第3章 経営者・従業員のESGへの理解を深めるには」では特に、企業と投資家の間におけるESG事項に関する問題が論じられている。

これらを経て「第4章 アクティブ投資家とESGカオス」「第5章 ESGインテグレーションとは何か」では、ESG課題に対する投資家そのものの性格や投資手法の多様性が論じられる。ここまでに、企業側が開示すべき情報、また、それを受けての投資家の投資や対話のあり方は現状、多様性、タイトルに沿えば「カオス」の状況にあることが指摘される。

そして章立ては「第6章 技術経営の視点からESGカオスを考える」「第7章 ビジネスと人権を両立させるサステナビリティ経営とは」「第8章 ESGカオスと企業経営・財務政策の基軸」「第9章 サステナブル資本主義における会計の役割」「第10章 わが国CGコードの特徴と今後の課題」「第11章 取締役会評価」「第12章 取締役会活性化の処方箋」とつづく。ESGなるワードに含まれる概念の広がり(人権)、また、そもそもの資本主義のあり方の模索(サステナブル資本主義)、そうした状況下において、マネジメント(企業経営)とそれを最終的に司る経

営者のガバナンス(企業統治)がいかになされていくべきか、経営者の任免・監視のあり方はいかにあるべきか、が議論されている。

ファイナンス論からではなく、組織論ベースでの経営戦略の立案・実施のあり方を専門分野の1つとしてきた評者からすれば、ESGカオスの中で各社のなすべき戦略を実際に起案し、そして実行に移していく従業員の存在。(第3章などで触れられているなど、議論はあるが)その存在に、より注目した議論があれば、実践の書としての価値がより高まったのではなかろうか。

投資家との対話のあり方にくわえての従業員とのそれについての議論である。カオスのなかで彼・彼女らが心底、納得して戦略立案・実施に取り組みうる。第1章にて、ESGにかかわる取り組みと企業価値の関係についての実証的な分析の蓄積が求められている。納得の材料となるエビデンスとして、そうした分析の蓄積をより強く求める。くわえて例えば、取り組みの後押しにつながりうる、より具体的な人事施策(採用、評価、報酬、教育などに関わる)の提示など、である。

執筆者の専門分野は多岐にわたるが例えば、そもそも「会計」とは、といった形でより基本的な概念などの再確認もある。専門外の者にとっても理解しやすい記述となっている。多くの読者が手に取られることでESGの問題が様々な観点から、より深く議論されることが期待される。